

青木正児の名物学研究とその評価について

辜 承 堯

Aoki Masaru's Etymological Studies and its Evaluation

GU Chengyao

Aoki Masaru (1887-1964) is one of the earliest scholars who study on Chinese traditional literature. This paper is focused on Aoki's Etymological Studies. His research method is comparing sound, shape and meaning from a large number of examples, to prove the change of name and object, and the reason of the isolation of the name and object of China and Japan. His research on Etymological Studies originated from his interest in Chinese customs, therefore, his research object mainly focuses on the name and object of China and Japan. While evaluating the positivism of its research, we can also find that most of its research is of its own interest.

キーワード：青木正児 (Aoki Masaru)、名物学 (Etymological Studies)、考証学 (textual research)、『中華名物考』 (*Tyūkameibutukō*)

はじめに

昭和十三年（1938）、恩師の一人鈴木虎雄（1878-1963）の定年退官に伴い、青木正見（1887-1964）はその後任として東北帝国大学から母校の京都帝国大学の文学部教授に迎えられた。卒業論文の指導をしたもう一人の恩師で、支那文学講座の初代教授として支那文学研究の礎を築いた狩野直喜（1868-1947）は、昭和三年（1928）に定年で大学を辞していた。狩野と二人三脚で長きにわたり支那学研究的現場を支えてきた鈴木退官、そして同講座の一期生でもある青木の就任は、第一世代から第二世代へ、京大の支那文学研究の歴史における一つの節目でもあった。

大正十四年（1926）、北京への在外留学中に地元の風習を図譜のかたちとして出版しようとした青木は、本業が多忙でその図譜に解説を施せず、図譜を東北大の図書館に残したまま京大に転任した。「何に彼につけて利用したいと思つて作成した図ではあるが、手近に無いので、わざわざ借り出すほどの必要にも迫られず、結局私の風俗研究熱も次第に冷えて来た¹⁾と青木自身が語っているように、資料所在の関係で、京大転任をきっかけにして、研究の関心は文人の趣味生活や名物学研究へと移ったのである。文人趣味生活の研究はすでに東北大在勤中に執筆した「支那人の自然観」の中の第五節「自然美の鑑賞（其の一、詩賦絵画と其の二、趣味生活）」（1935年）や「題画文学の発展」（1937年）、「支那の戦乱と文人の活躍」（1938年）などからその傾向が現れていた。その延長線として、「何紹基の書学」（1940年）、「詩文書画論に於ける虚実の理」（1942年）、「中華文人の生活」（1947年）などの論考が見られる。

名物学の研究については、「私は還暦停年で京都大学を退く前年、最後の講義に何か変わったものを置土産にと思つて、試みた「名物学緒論」で二十一年の四月から十二月まで続けた²⁾と書いているように、約三十年の教壇生活の華麗なエピローグとして、青木は名物学を選んで講義したのである。本業の中国文学の戯曲詩賦小説における古典の学殖、加えて書画音楽に関する長年の蓄積、さらに文人の趣味生活への深い理解、このような多方面にわたる知識を網羅して取り組んだのがこの名物学の講義であった。青木の晩年の仕事について、京大での青木の後任であった吉川幸次郎は次のように評価している。

晩年の博士は、余事として、中国の食品および器物の歴史に興味を持ち、『中華名物考』

1) 青木正見「自序」（『中華名物考』所収、『青木正見全集』（以下『全集』と略す）第八巻）4頁。

2) 同前注、5頁。

(昭和三十四年)を代表とし、『華国風味』(昭和三十四年)、『琴棋書画』(昭和三十二年)、『抱樽酒話』(昭和三十二年)、『中華飲酒詩選』(昭和三十六年)『中華茶書』(昭和三十七年)その他の著書があった。必ずしも好事の業でなく、いかなる名の食品なり器物なりは、いかなる実体と歴史を持つか、つまり「名」と「物」との関係を、実証的に究明するものであって、『中華名物考』の自序に、「前人未発の試み」という。³⁾

では、青木が晩年に力を注いだ「前人未発の試み」という名物学はいったいどのような学問だったのであろうか。本研究ではこの問題をめぐって、日中両国の名物学研究の流れをたどりながら、青木により構築された名物学の理論とアプローチを明らかにしようと思う。

1 名物学の研究系譜・中国側

名物学とは物と物の名のかかわりについて研究する学問である。一般には、ある時代ある地域において特定の物に名が付けられ、その物と名とが一对一の関係にあることで、誰しもその物を見ればその物に対応する名を想起し、その名を聞けばその名に対応する物を思い浮かべられるというかかわりである。もし物の名が一国内で統一され、しかも時代による変遷が一切なければ、物とその名の間に何の混乱も生じないはずであるが、現実には、物の名が地域や時代によって変わることは少なくない。このように、後世の学者が時代の変遷により導かれた物の名の変化が究明され始めたことで、名物学という学問が誕生した。管見の限り、日本では名物学に関する専門書は青木の「名物学序説」(1958年)と棚橋淳二の『名物学』(2006年)しかないので、以下はこの二冊の著書の内容に即して名物学の研究系譜を整理したい。

中国において名物学研究は、言語文字を対象にする「小学」と呼ばれる訓詁学⁴⁾の下位にある一分野である。訓詁学の研究の歴史は非常に古く、春秋戦国時代(紀元前八世紀-三世紀)から漢代初期(紀元前二世紀)にかけて成立した『爾雅』(著者未詳、紀元前二世紀頃成立)という最古の辞書まで遡ることができる。もともと経書を正しく解読するための手引きとして編まれたこの書物は、全体を「釈~」というかたちで十九の領域に分類して解説しているが、そのなかの第十三「釈草」から第十九「釈畜」までは、経典とくに『詩経』に多く出てくる動植物の名称を考証、解説したものであるため、古代中国の動植物名語彙の辞書であると言える。勿

3) 吉川幸次郎「青木正児博士業績大要」(『吉川幸次郎全集』第十七卷所収、筑摩書房、1969年) 339頁。

4) 「訓」は解釈、「詁」は「古」に通ずるという意味である。即ち古い言葉の字句の意義を解釈すること。訓詁学は中国の古典解釈の学問である。漢代から流行し、唐代に集成され、宋代以降は、字音研究が発達し、形・音・義という漢字の三要素から緻密な考証が行われていた。

論、語彙の注釈を目的とした辞書であるため極めて簡単な説明でしかないが、それでも全部でおよそ二〇九一に及ぶ項目に解釈を施している。「〔『爾雅』〕の前の三篇は言語の訓詁、即ち訓詁学とも謂ふべく、後の十六篇は名物の訓詁、即ち名物学とも謂ふべきである。因つて名物学は訓詁学に従属して発生したと見るよりも、寧ろ訓詁学の一大部分として、之を一体不可分の密接な関係を保つて発生したものと見る事が出来よう」⁵⁾ という青木の主張が見られるほか、「一般には名物を明らむることも亦訓詁の一部と考へられ、従属的地位に置かれているのである。(中略)然し古来の訓詁学を大観するに、名物の訓詁、すなはち名物学が其の重要な地位を占めているし、また其れから分離独立して一科を成しているものさへ有るので、私は特に之を一科の学として取上げた次第である」⁶⁾ と、従来訓詁学の枠内に置かれた名物学をその中から独立させ新しき学問として建てようとする青木の意欲が窺える。それ故に、青木は物の名を正すことを編纂目的とする『爾雅』を名物学の嚆矢と見なしている。『爾雅』以降はその追補に当たる『小爾雅』(作者と成立年代不明)や三国時代の魏(220-265)の張揖によって編纂された辞典『広雅』などが見られる。

「後漢の末(三世紀の初)に、名物の訓詁を主とする書が現れて、此に名物学独立の緒端が開けた」と青木が述べている通り、この後漢後期の劉熙(生没年不詳、160年頃生まれ)の著した辞典『釈名』は、その自序に「物名即以義釈」と著書の趣旨を表明しているように、各項目の単語を類似の音の字によって解釈し、その後に補足を加えるかたちで説明している⁷⁾。「著者が名物学的自覚を以て此書を編していたことを認め得られる」ため、「此の書こそ名物学の鼻祖とも謂ふべきであらう」と青木は指摘している。だが、『釈名』の系統を継ぐ書物はほとんど見られず、『爾雅』のような『詩経』に登場する動植物に関する名物学研究が次第に盛んになっていった。その理由を言うならば、『詩経』の編集者とされる孔子が、詩を学ぶ七つのメリットを列挙する際に、「多識於鳥獸草木之名」(鳥獸草木の名を多く識る)⁸⁾と記し、詩を学ぶことによって多くの動植物の名を識ることができることを指摘したのがこれに当たるであろう。つまり詩が

5) 青木正見「名物学序説」、『全集』第八卷、10頁。

6) 青木正見「名物学序説」、『全集』第八卷、9頁。

7) この方法は声訓という。例えばそのなかの「釈天篇」に、「日」と「月」に対して「日、実也。光明盛実也」、「月、闕也。満則闕也」とそれぞれ解釈を加えている。「日」(ジツ)を「実」(ジツ)で、「月」(ゲツ)を「闕如」(ケツ)で解釈している。ちなみに、貝原益軒は『釈名』から名を取り、日本語の単語の語源について考察した『日本釈名』を著した。

8) 『論語』の「太貨」において次のような一文が見られる。「子曰。小子何莫学夫詩。詩可以興。可以觀。可以羣。可以怨。邇之事父。遠之事君。多識於鳥獸草木之名。」(子曰く、小子、何ぞ夫の詩を学ぶこと莫きや。詩は以て興す可く、以て觀る可く、以て羣す可く、以て怨む可し。之を邇くしては父に事え、之を遠くしては君に事う。多く鳥獸草木の名を識る。)

「多識之学」と見なされていたためである。それ故に、後世の人は『詩経』の名物に関する研究に力を注いだのであった。

その中で最も早く現れたのは三国時代（三世紀頃）の呉の陸璣による『毛詩草木鳥獸蟲魚疏』である。原本は早くに散逸したが、この書は『詩経』の中の動植物について、作者の生きている時代のその名称、各地の方言、形状、食味、薬性などがつぶさに説明され、訓詁を主とする『爾雅』と異なり、語の意味よりも実体の究明のほうに重点が置かれていたため、これはすでに文学に現れた自然物の名物学的研究と見なすことができる⁹⁾。つまり「名物学の根源は『詩経』の名物学に在つた」、「純粹な名物学は此に始まると謂ふべき」である。この書に次いで、宋代の蔡卞（1058-1117）の『毛詩名物解』（二十卷）、元代の許謙（1269-1337）の『詩集伝名物鈔』（八卷）、清代の陳大章（生没年不詳）の『詩伝名物集覧』（十二卷）、徐鼎の『毛詩名物図説』などが挙げられる。そしてこの影響を受けて、日本では淵在寛の『陸氏草木鳥獸蟲魚疏図解』（五卷、1779年）、岡元鳳の『毛詩品物図考』（七卷、1785年）なども見られる。

『爾雅』の成立以来、これに関する注釈書が多く現れた。世に通行しているものは東晋の郭璞（276-324）の『爾雅』注、宋の邢昺（932-1010）の『爾雅』疏、邵晋涵（1744-1832）の『爾雅正義』、郝懿行（1757-1825）の『爾雅義疏』（十九卷）の四つが見られる¹⁰⁾。『爾雅』に関する解説書は前述した郭璞の『爾雅図讀』（一卷）の記録が残っていたが、この書はすでに散逸した。「名物の図解では是が最も早いので、其れは爾雅の研究が訓詁学の外に名物学として独立発展して来た一現象として注目すべき」である。現存の書のなかに、詩人陸游の孫であった北宋の陸佃（1042-1102）の『埤雅』（二十卷）、南宋の羅願（1136-1184）の『爾雅翼』（三十二卷）、明末の方以智（1611-1671）の『通雅』（五十二卷）などが挙げられる。これらの中で『通雅』については、「此書は爾雅の学を祖述するものであるから、訓詁と名物とを兼ねているが、門を分つてこと二十四、その中六門を除けば余は皆名物の考証であり、而も徴引は甚だ広くして考據は精核、近世に於て此種の著書中最も傑出するものである」と青木が評している。

以上のように、早期の名物学は訓詁学のもとで、『詩経』の動植物の辨別と『爾雅』の注釈・補足という二つの系統で行われ、『爾雅』も『詩経』の訓詁を主として出発した学であるから、名物学の本幹を成しつつ其の発達を促して来た」と青木は指摘している。さらにこの二つの系統以外の名物学研究について、注目すべきものは礼学とのかかわりである。中国で礼といえ

9) 加納喜光「『毛詩草木鳥獸蟲魚疏』——詩経名物学の祖」（『月刊しにか』第七卷第十二号、1996年）、18-23頁。

10) 『爾雅』の注釈書に関する研究は小林清市の「清朝考証学派の博物学——『爾雅』積草篇注を手掛かりに——」（『東アジアの本草と博物学の世界・上』所収、思文閣、1995年）を参照。

日常の礼儀作法、冠婚葬祭にとどまらず、家、学校、社会、朝廷といった場における作法や式次第も含まれていた。また儒教の理論に基づき成立された礼教は『周礼』『儀礼』『礼記』（「三礼」とも呼ばれる）を經典にして、社会秩序の維持、倫理規範の保全という機能を果たしていたため、歴代の王朝は礼学を大切に「三礼」に関する注釈書が大量に生まれたのであった。例えば、清朝に盛行していた考証学の気風により、宮室・車服・器用・飲食などに関する名物学的な研究が盛んに行われた。『爾雅』と同じように、礼学の名物学研究も「三礼」の注釈・注疏と図解との二つの方面から展開されていた。前者すなわち注釈・注疏について、「『周礼』は周代の官制を記したもので、どの程度実施されたものかは疑問であるが、官職は甚だ多くして精密を極めてをり、其等の職が掌るところの名物に関する記録も多く、之に対する注疏は名物学を構成する」¹¹⁾と青木は述べる一方、後者すなわち図解に関しては、「三礼の名物研究につき注疏に次いで注目すべきは、服飾器用等の物品を図解した著述の発達」とも指摘している。

礼学以外の名物学の展開について、青木は以下の五つの分野から検討していた。

- ア 格古方面（器物由緒の考証、文法具の鑑賞）
- イ 本草方面（薬物学、動植物鉱物学。「本草学は薬性を研究する前提として其の名物学的研究を必須としている」）
- ウ 種樹方面（園芸学。最古の書は晋代の戴凱之の『竹譜』、その他宋代の欧陽脩の『洛陽牡丹記』、蔡襄の『荔枝譜』など、集大成のものは清の康熙年間に勅撰された『佩文齋広群芳譜』（百巻、1708年刊）、呉其濬『植物名実図考』（三十八巻）及び『植物名実図考長篇』（二十二巻、いずれも1848年刊）
- エ 物産方面（「此種の書に往々其の地方の物産に関する記録を主としたものが有る。是れ亦名物学の一方面と見なすことが出来る」）
- オ 類書方面（諸般の物品事象に関する古来の文献を類別編集。明代の王圻の『三才図会』（百〇六巻、1609年刊）、江戸期の寺島良安の『和漢三才図会』（百〇六巻、1712年刊）

清の時代になると、名物学の研究はさらに礼学の分野で細分化され、『釈名』のような類聚的名物学より、器物、儀礼、車服に関する考証学的名物学へと発展していった。考証学の時代と呼ばれた清代には、その前代宋・明に隆盛を極めた性理学への反動として、顧炎武や黄宗羲をはじめとする学者が、古典を古典として正確に読むために厳密な校訂が必要だとし、膨大な資

11) 青木正見「名物学序説」、『全集』第八巻、16-17頁。

料を比較検討し、古典の字義を一々細かく調査した。このような清朝考証学の成果は次々と現れ、任大椿の『冕服积例』『深衣积例』、江永の『深衣考誤』『郷党図説』『儀礼积官増注』、戴震の『考工記図注』、程瑤田の『九谷考』『考工創物小記』、阮元の『考工記車制図解』、任啓運の『朝廟宮室考』、焦循の『群經宮室図』などが相次いで世に現れた。「清代に至り特に或る限られた名物を取り出して研究する、考証学的名物学が興つた。其れは経学に於ける考証学の興隆に伴ひ、其の副産物として出現したものと考へられるが、主として礼学に関するものが多い」、と青木が指摘しているように、衣服・飲食・住居・工芸などの方面に偏った研究であった。一方、『爾雅』『詩経』の動植物に関する研究が同時に行われ、郝懿行の『爾雅義疏』、邵晋涵の『爾雅正義』、胡成珙の『小爾雅義疏』、王念孫の『広雅疏証』なども挙げられるが、「其等とは多くは零細な諸説を雑記するに止まり、考証的要素に乏しい」と言ってもいい。このように清代における考証学は礼学の方面に著しい発展を遂げたが、名物学の研究はそれほど推進されなかったのである。

2 名物学の研究系譜・日本側

以上の中国における名物学研究の流れを鳥瞰してみると、「訓詁学としての名物学も、結局は考証学に合流し帰着した」と青木がまとめているように、訓詁学のもとで花が咲いた名物学は、考証学的な名物をもって成果とすることになったわけであった。では、日本での名物学はどのように研究されていたか。

日本植物病理学の先駆者白井光太郎（1863-1932）は大正二年（1913）に催された貝原益軒の逝去二百周年記念会で「博物学者としての貝原益軒」という文章を発表し、「今日の博物学と先生の時代の博物学とは違っている。其の代りに本草学・名物学・物産学と云ふ此の三つの科目が有つた。この三つを合したものを先づ博物学と云うたのである」¹²⁾と論じているように、江戸時代は近代以降とは異なり、本草学・名物学・物産学が博物学のもとに置かれていたことが分かる。実は江戸時代の博物学の前身は本草学であり、そしてその本草学の起源は中国まで遡れる¹³⁾。つまり江戸時代における名物学は博物学の一分野と捉えられていたのであった。

中国の本草を整理し、体系づけた人は梁の陶弘景（456-536）であった。彼は『神農本草』と『名医別録』を中心に再整理し、『本草経集注』を齊の永元二年（500）頃にまとめた。日本への中国本草学の移入はこの『本草経集注』の段階から始まる。欽明天皇二三年（562）、呉の智聡

12) 白井光太郎著、木村陽二郎編『白井光太郎著作集』第一巻（科学書院、1985年）114頁。

13) 西村三郎『文明のなかの博物学 西欧と日本（上）』（紀伊国屋書店、1999年）186-188頁。

が仏像・伎楽調度のほか内外典薬書・明堂図など一六四巻をもって来日し、その中に『本草経集注』が含まれていた可能性があるとする。文武天皇の大宝元年（701）に実施された大宝令では、禁裏外の医療や医学教育を司る典薬寮の医師などには、『本草経集注』が教科書として使われていたという記録が見られる。

延暦六年（787）、典薬寮は『本草経集注』を廃し新たに伝来した蘇敬の編纂による『新修本草』（657年）を採用した。そして延喜十八年（918）頃、医学博士深根輔仁が、醍醐天皇の勅命を奉じて『本草和名』を完成させた。『本草和名』は『新修本草』所載の八五〇種のほか、諸家食経一〇五種など総計一〇二五種の薬物について、『新修本草』の分類法で配列して各品ごとに名称を考定している。これによつてはじめて漢名と和名の対比が行われたのである。『本草和名』所蔵品のうち中国産で日本になかった植物の例を挙げよう¹⁴⁾。

中国本草名	和名	今日の和名
人參	加乃尔介佐（カノニケクサ）	ニンジン
梅実	牟女（ムメ）	ウメ
柳華	之多利也奈岐（シタリヤナギ）	シダレヤナギ
牡丹	布加美久佐（フカミクサ）	ボタン
芍薬	衣比須久須利（エビスクスリ）	シャクヤク
菊花	加波良於波岐（カワラオワキ）	キク

以上に示したように、和名は、ムメ・シタリヤナギを除き今日の和名とかなり異なる名が挙げられている。その原因はおそらくこれらの物が舶来品であったからである。今日の和名は明らかに漢名を呉音読みしたものに由来している。それらは当時まだ外来名の響きが強かったはずである。つまり通用はしていたが、外来名であったが故に和名として記載されなかったと考えられる。このように漢名を和名に如何に対応させるかという問題が現れた。

以上のような制約から本草学の発展は、本草書に記載された薬物に対する和産の有無、比較、考定の分野に集中することになる。これが所謂名物学である。『本草和名』はこの名物学の発端と言える。鎌倉時代の名物学は惟宗具俊の『本草色葉抄』（八巻、1284年）に代表される。室町時代には東麓破衲により編纂された辞書『下学集』（1444年）がある。江戸時代になると、古代の典籍・記紀万葉などの研究が盛行し、古語についての考証をもとに名物確定の作業が進められた。江戸前期には医学者たちが本草学を中心に行っていたが、江戸中期から後期にかけて博物学が盛んになり、各地から動植物が集められ、薬品会・物産会などが開催され、各地にお

14) 遠藤正治の『本草学と洋学－小野蘭山学統の研究－』（思文閣、2003年）6-7頁。

ける動植物の名が実物を介して当時の標準名と対比された¹⁵⁾。

ここでは江戸前期の本草学的な名物学研究について述べたい。儒者でもあり本草学者でもあった松岡恕庵(1668-1746)は、初め経学を修め『詩経』を読むうちに、そこに出る動植物をよく知りたいと思うようになった。そこで稲生若水(1655-1715)の門を叩いて本草を修めたのであった。それは松岡自ら「予昔葩経(『詩経』)ヲ読ミテ名物ノ明ラメ難キコトヲ苦シム。慨然トシテ志シ爾來諸士ノ間ニ周旋シテ研究シテ已マズ」¹⁶⁾と嘆いている。また、松岡から本草の教えを受けた名古屋の浅井図南は、「恕庵先生はもと本草者にあらず。儒家たれども詩経の名物を困しみ、稲生若水にしたがひて、本草を三遍見給ひしが、大方暗記して、同じ比、後藤常之進などいへる本草者あれど、其右に出でたり。故に人しきりに本草をとひ終ひに本業となりしかど、其の志にあらず」¹⁷⁾といったようである。この末尾の語は適切に松岡を評している。松岡は名物に終始したようであるが、結果的には本草学中の博物学的要素を明らかにして、博物学を一步前進させたことになったと言える。

また、『国史草木昆虫考』を書いた江戸後期の医師であった曾占春(1758-1834)は、中国伝来の名物学を、日本の史書の名物に移した。曾占春の場合は、訓詁の学でなく、もはや全く名物学であった。そしてその難しさを、「ソレ、国史ヲ観ル者ハ尽ク本草ニ通ズルコト能ハズ。本草ヲ検スル者多クハ国史ニ疎ナリ。是故、古ノ名物、今復得テ識ルベカラザル者アリ」と指摘している。曾占春は名物学そのものについては、元来「名物ハ詩書ノ用ナリ」と言い、また、「名物ノ学ハ寔ニ六経中ノ一種ナリ。則チ本草方術ノ学ト相混ジテコレヲ道フベケムヤ」と戒めている。これは青木の前述した、名物学の発端を名物の訓詁に発し、名物の考証をもって究極の目的として、清代の中葉以降訓詁学の隆盛に伴って考証に力を尽したが、結局は考証学になってしまった、という結論に通ずる。

江戸時代の本草学者は、『本草綱目』のような中国本草に載った植物の漢名に同定できる植物が日本産のどれかを判定することに苦心した。中国の実物を見られずに行うのであるから非常に難しい。漢名の植物を日本のそれに確定させる際に誤りが生じるのは当然で、その弊害は長く後世に及んだ。享保の頃から生植物が輸入され、生薬も多く渡って来たので段々分かるようになった¹⁸⁾。このように本草学とは名と実物とを弁明する作業であり、植物名物学だと植物学者の北村四郎が主張している。彼の見方に従えば、『本草綱目』の著者の李時珍も、それを学んだ

15) 棚橋淳二『名物学』(楽志舎、2006年)10頁。

16) 松岡玄達原著、難波恒雄編集『用薬須知』(漢方文献刊行会、1972年)29頁。

17) 三熊花顛著、伴高蹊補、宗政五十緒校注『続近世畸人伝』第二卷(平凡社、1972年)64頁。

18) 上野益三『日本博物史』(平凡社、1973年)110頁。

貝原益軒、小野蘭山、あるいは岩崎灌園も、いずれも植物名物学者である¹⁹⁾。しかし、生物学者である上野益三がこの見方に反対し、「蘭山の『花彙』は実利をはなれた純粹の植物図譜で、これを名物学に片づけてしまうわけにはゆかない。岩崎常正（灌園）の『本草図譜』も、その分類大綱こそ前^{フレ}リネ時代の『本草綱目』に準拠しているけれども、実質は一大植物図譜で、その紀文も名物的な部分は極めて少なく、これを直ちに名物学として片づけてしまつては、科学的博物学の成長を論ずることがむずかしい」²⁰⁾と評している。このように薬物という観点から自然物を研究する本草学研究は、時代が下がるとともに、必ずしも薬物に拘らずに、広く自然物全般について調べ、その異同を明瞭にする博物学へと変じていった。

3 青木の名物学研究の経過

青木の名物学については、彼自身の著作『中華名物考』の自序に詳細な説明があるほかに、『青木正児全集』第八巻の末尾に綴られている水谷真成の解説文「青木正児先生の名物学」と、『華国風味』（1984年）に附されている戸川芳郎の適切な「解説」、2007年に行われた展覧会の冊子「『遊心』の祝福——中国文学者・青木正児の世界」に収められているコラム「名物学に関して」が見られる。以上の先行研究を踏まえながら、青木名物学の成立過程の経緯および特徴を明らかにする。

前節に述べたように、青木は子供の頃から庶民文化を愛好する一方、絵画にも関心を寄せていた。このような趣味が成年後の青木の研究方向に大きな影響を与えたことは見逃すことができない。青木は京大在学中、「専攻の支那文学の理會を助ける為に、中華の風俗を知る必要を感じて、折々研究室で上海出版の『点石齋画報』を楽しみつつ閲覽し」たり、また休暇帰郷中には、『清俗紀聞』（13巻本、寛政年間、長崎奉行中川忠英編）を一冊欠けていたにもかかわらず、「飛び付いて買つて来た」。そして、大正十四年（1925）、当時東北帝国大学の助教授であった青木は、北京在外研究の機会を活かし、地元の絵師に『北京風俗図譜』を描いてもらった。『北京風俗図譜』のほかに、北京滞在中の青木は『新春画冊』、『祭礼紙様』などの風俗関係のものを、そして翌年上海で見学した間に当時用いられた切符などの類を丹念に集めた。「望子（看板）考」、「鼻煙」のような論考は風俗研究の領域に入れる一方、名物研究の傾向も含まれている。例えば、「局票」（当時芸人を呼ぶときに使う書付け）という名称を聞いても、日本人は勿論、今の中国人にとってもそれが如何なるものであるか知る人はほとんどいない。ところが、青木

19) 藪内清、吉田光邦編『明清時代の科学技術史』（朋友書店、1997年）183-186頁。

20) 前掲上野益三『日本博物史』、111頁。

の集めた「門票」(入場券)のなかには実物の「局票」が保存されており、我々が当時の風俗を知る上で貴重な資料を提供してくれると同時に、青木の興味が当時既にこういったところにまで及んでいたことが窺える。これらの資料は青木名物学研究の実態を解明するために重要な材料だと考えられる。それが故に京大の学生時代から東北大の教授時代までの時間を青木名物学研究の胎動期と見なすことができるのである。

青木が本格的に名物学研究を始めたのは昭和十六年(1941)、即ち京大へ転任して三年目であった。中華文化の紹介を目的とする『麗沢叢書』を出版する際に、この叢書に収める予定の中国典籍の翻訳について、『歴代画論』を奥村伊九良、『考槃余事』を中田勇次郎、『秘伝花鏡』を杉本行夫に振り当てると、これらの若手研究者は名と物に関する質問を次々と聞きに来た。「其中、最も印象に残っている問題は、奥村君から『画継』雑説に、徽宗が画院に命じて孔雀が藤墩に上らうとする図を書かしたと有る、この『藤墩』と云ふ物に就いて問を受けたことである。墩は字書によれば、平地に堆くなつた場所のことであり、それ以外の解釈は見えない。それでは此処は通じないから疑問を持ち込んだわけである。私も色々当つて見たが、適当な解を見出し得ずして頭を悩ました。すると道は近きに在り、『考槃余事』起居器服箋に『坐墩』が見当り、其れが藤製の円い腰掛であることが知れた。今一つは杉本君から『秘伝花鏡』治諸蟲蠹法の条の『桐油脚』に就いて問を受けた。脚の意味が分らないのである。さし迫っているので疑問のまま印刷に廻はさせてしまつたが、私はやはり気になつて心に掛け、得る所を『支那学』掲載の『名義瑣談』の一項として発表した。『考槃余事』には器具の名、『秘伝花鏡』には植物動物が夥しく出て来る。其の和名を調べたりすることが、私の名物学の端緒であつたわけである」²¹⁾と自身を振り返っている。

つまり、『麗沢叢書』の刊行によって若手研究者の中国古典の中に存在する名と物との確当しがたい問いに触発され、調べていくうちに名物学研究を重視し始めるようになったのである。そして上述の「桐油脚」問題を含めて、中国各種の餅の食品、匙で飯を食べる歴史、うどんの歴史などの昭和十九年から二十二年にかけての論考を一冊にまとめ『華国風味』(1949年)として出版した。青木自身は「これが私の名物学建設の第一歩であつた」と位置づけている。確かに、この時期に中国風俗あるいは飲食に関する研究に偏っている論考が多いので、正真正銘の名物研究とは言い難い。それゆえに、この時期の青木の活動は名物学研究の始動期だと言える。

その「第一歩」の研究と関わる重要資料として名古屋大学附属図書館に所蔵される「青木文庫」に『鄙事備忘』『竹窓雑鈔』(一、二)といったノートが見られる。昭和二十年から二十一

21) 青木正児「自序」(『中華名物考』所収、『全集』第八巻)4頁。

年までの読書筆記である。これらのノートは飲食関係を主な内容としている。そのうち『竹窓雑鈔』（一）の冒頭に「鄙事備忘統編也」といった注がつけられていたことから、時間的にも内容的にも、この三冊のノートには連続性をもたせていたと考えられる。『華国風味』の中に収められている「落雁と白雪糕」のような論考は、『鄙事備忘』の数多くの条目を基礎資料として完成されたことが垣間見えるし、またそれ以外の筆記でも、後に出版した『中華名物考』（1959年）の下調べとなっている。

青木の名物学の本格的な理論建設時期は彼の「名物学緒論」の講義を待たなければならない。「私は還暦停年で京都大学を退く前年、最後の講義になにか変わったものを置土産にと思つて、試みたのが『名物学緒論』で、二十一年の四月から十二月まで続けた。何しろ前人未発の試みなので、組織に相当苦勞をしたが、楽しくもあつた。其後二十八年に九州大学から短期の出張講義を頼まれたので、是を機会に旧稿の蕪穢を治め、『名物学通論』を題して之を講じた。其後一たび山口大学で講じ、今又立命館大学で講じつつある。其の都度多少の修正は加へたが、未だ是を一冊の書として世に問ふだけの自信は持てない。因て今回本書（『中華名物考』）を出版するに当り、其の要旨を節録して巻頭に置き、私の謂はゆる中華名物学の体系を公にすることとした次第である」²²⁾と自信を持ちながら語っているように、青木は最終講義のために名物学研究を選んだのであつた。昭和三十四年（1959）年、橙とユズ、葵と向日葵、子規（ホトトギス）と（郭公）カッコウ、『詩経』の中の「錡」という道具のかたちなどに関する緻密な論考を含めて、青木は長年にわたって研究した名物学研究を花咲かせ、『中華名物考』として出版させた。その書の巻頭に置かれた「名物学序説」は前節に引用された名物学の理論であるといえよう。それ故に、定年退官の直前に講義した名物学から山口大学で教鞭を取るまでの期間は、青木の名物学の成熟期に当たると言える。

指摘すべきことは、青木に情熱を注ぎ次々と名物学の論考を発表させた現実の状況も見逃すことができないことであるということだ。戦中戦後の不如意な食糧事情も彼の名物学研究を加速させたのであつた。青木は自身の論考の中で自身の不自由な生活に触れている。以前に引用した『中華名物考』の「自序」に、「之（名物学研究）を進んで実行に移らしめたものは、戦時の食糧事情であつた。隠遁者に等しい私の生活にも、現実の厳しさは、ひしひしと迫り来り、窮乏の中に在つて、過去の甘旨な食生活の追憶に聊か慰めを求めざるを得なくなつた」²³⁾と吐露しているほかに、「昭和二十二年七月主食遅配のもなかに」と文末に書かれている『華国風味』

22) 青木正見「自序」（『中華名物考』所収、『全集』第八巻）5頁。

23) 同前注、5頁。

の自序に、「近年の食生活の窮屈なところから、この方の神経がただ尖りに尖つて、本を読んでもとかく食ひ物の事が目に付き易く、書く事も食ひ物の話が筆が走りたがる、文学も糸瓜もあつたものでない」²⁴⁾とあることから、それが窺われる。さらに昭和二十三年(1948)に発表した「琴棋書画」の最後に、「私もいよいよ定年退職で扶持に離れる身となつた。子供の時父に買つてもらつた絵手本を種にして画を売るほどの腕もなし、まあ此の一篇を草し、之を売つて原稿紙を買ひ、雑文でも書いて配給米に換へることにしよう」²⁵⁾と冗談半分の口吻で厳しい食事情を漏らしている。

4 青木の名物学研究のアプローチ

日常生活におけるあらゆる風習を面白いがる好奇心、膨大な読書量、該博な知識は青木の名物学研究の前提と考えられる。これも江戸期に名物学が博物学の枠内に置かれた理由である。青木の論考において随所に見られる引用は、その読書量を裏付けている。青木は自身の読書について、次のように語っている。

夫れ物類は限り無く、品目繁多にして識り難きものが多く、凡そ異国の書を読むに方つて、是くらい厄介なものは有るまい。而も物そのものを好く知つていないと、折角の叙述が了解出来かねるし、仮令略ぼ理會せられても、どうもピンと来ぬ。是は吾々が支那の書を読むに方つて常に悩まされている一事であつて、字典ぐらいを引いて見ても適切な訓詁が出て来ぬ物が多いし、たとひ有つても文字上の説明では腑に落ちかねるものが少くない。余の読書に於けるや極めてずほらな不求甚解主義であつて、解らぬままに打やつて置くは数限り無いのであるが、それでも頭のどこかに疑問が残つていて、他日偶然その解答に出くはすことが往々有る。²⁶⁾

『青木正児全集』から名物に関する論考を検索した結果を次の表にまとめる。

No.	時間	題目	No.	時間	題目
1	昭和18年1月	鹹菜野話	38	昭和28年1月	白雪糕
2	19年7月	愛餅の説	39	28年1月	茶
3	19年9月	炒麵	40	28年1月	卓袱料理
4	19年9月	豚肝	41	28年1月	豆腐
5	19年9月	包漿	42	28年1月	納豆

24) 青木正児「自序」(『華国風味』所収、『全集』第九卷)426頁。

25) 青木正児『琴棋書画』、『全集』第七卷、210頁。

26) 青木正児「名義瑣談」、『全集』第八卷、31頁。

No.	時 間	題 目	No.	時 間	題 目
6	19年 9月	油脚・茶脚・酒脚	43	28年 1月	饅頭
7	19年 9月	茶蕪	44	28年 1月	饅飩
8	19年 9月	夜裏香の花	45	28年 1月	青菜
9	19年11月	用匙喫飯考	46	28年 1月	孟宗竹
10	20年 4月	饅飩の歴史	47	28年 4月	祇園の豆腐
11	20年 6月	焼筍	48	28年 9月	重陽
12	20年12月	花彫	49	28年10月	蘭草と蘭花
13	21年 1月	愛餅余話－南北朝以前の話	50	29年 1月	支那の鰻料理
14	21年 8月	粉食小史	51	29年 1月	屠蘇考
15	21年10月	陶然亭（上）	52	29年 3月	子規と郭公
16	22年 5月	陶然亭（下）	53	29年 6月	葵藿考
17	22年 8月	花甲寿菜單	54	29年 8月	向日葵
18	22年 8月	落雁と白雪糕	55	31年 6月	茴香
19	22年 8月	末茶源流	56	31年 9月	八角茴香
20	22年 9月	醃菜譜	57	32年10月	芝蘭と鮑魚
21	22年 9月	柚の香頭	58	33年 1月	懷香賦の序
22	24年 2月	夜光杯兕觥と可盃	59	33年 8月	鷄頭と鷄冠
23	24年 2月	葉玉船	60	33年 8月	鴛鴦と鸚鵡
24	24年 2月	三雅と武蔵野	61	33年 8月	鮭はサケに非ず
25	24年 2月	桃核杯	62	33年 8月	櫻桃はユスラウメに非ず
26	24年 2月	金蓮杯と解語杯	63	33年 8月	茱萸はグミに非ず
27	24年 2月	碧筍杯と軟杯	64	33年 8月	鶯はウグヒスに非ず
28	24年 3月	芍薬の和	65	33年 8月	合一扇
29	25年 3月	桑落酒	66	33年 9月	田中博士の橙説を駁す
30	26年10月	山口の梅	67	33年 9月	「錡」の形状に就いて
31	26年10月	香橙	68	33年 9月	「薇」はゼンマイに非ず
32	27年 1月	緑萼梅	69	33年 9月	蘭芷と芝蘭
33	27年 4月	柘漿	70	33年12月	莽草
34	27年 6月	五味の説	71	33年12月	懷香握蘭
35	27年 6月	荔枝	72	33年12月	豆腐腐談
36	27年10月	月と兎	73	36年10月	橄欖の実
37	28年 1月	八種唐菓子	74	37年10月	中国上代の酒器

日常生活への関心により書かれた名物論考として次の一例を見てみよう。「学生の頃、或時休暇で下関の家に帰省して見ると、庭の小池にカモともつかぬ、ラシドリともつかぬ、見馴れぬ水鳥が一つがひ浮んでいた」²⁷⁾ のを見た青木は、この近隣の人が朝鮮から持って帰った鳥に興味をもち、宋代の羅願の『爾雅翼』や明代の李時珍の『本草綱目』、江戸期の岡元鳳の『毛詩品物

27) 青木正見「鴛鴦と鸚鵡」、『全集』第八巻、178-179頁。

図考』などの資料を調べた後、漢字で「鴛鴦」を書く鳥は日本で言うオシドリではなく、オシドリは鶺鴒けいせいに当たるものだと証明した。

また、「三年ばかり前のことであつたかと思ふが、本学（山口大学）教育学部の山本武夫教授から質問を受けた。其れは万葉集に霍公鳥（ホトトギス）は立夏より鳴き始めるのが定りであると記されているが、此事は支那の古典に本づく所有りや否や、と云ふのである。私は未だ聞かざる旨を答へた。それよりも私が不思議に思つたのは、ホトトギスには霍公鳥といふ漢名の当てられていることである。蓋し霍公は郭公と同音であり、郭公はカッコウ鳥のことで、ホトトギスとは同類異種の鳥である。其後閑に乗じて鹿持雅澄の『万葉集品物解』を繙いて見るに、集中には『保登等芸須』などの音を当てたものの外は皆『霍公鳥』とのみ書いてあるといふことである。さらに『和名類聚抄』を検するに『郭公』の和名を『保度度木須』としてある。唐との交通の盛んであつた時代に、どうして此のやうな誤解をしたものかと腑に落ちかねた²⁸⁾という由来により、青木は子規（ホトトギス）と霍公（カッコウ）について名物学的な考察を行った。

これは上述した『本草和名』所蔵品に出てきた和名を呉音読みにした状況と同じ、平安時代に遣唐使や留学生がもたらした漢音を正音とするよう朝廷から通達が出されていたのに、『郭公』の和名を呉音読みにしたことが問題となっている。『爾雅』、『詩経』、『離騷』、前漢の楊雄の『方言』、後漢の王逸の注釈した『離騷』、許慎の『説文解字』、三国時代の陸璣『毛詩草木鳥獸蟲魚疏』、西晋の郭璞の『爾雅』注釈、東晋の常璩の『華陽国志』、北魏の賈思勰の『齊民要術』、唐代の顔師古の『反離騷』、陳藏器的『本草拾遺』、北宋の邵伯温の『聞見前録』、南宋の陳造の『布穀吟』、明代の李詔の『戒庵漫筆』、李時珍『本草綱目』、清代の高繼珩の『蝶階外史』、著者不明の『禽經』、そして『万葉集』、『古事記』、鎌倉時代の菅原為長が編纂した『字鏡集』、小野蘭山『本草綱目啓蒙』、貝原益軒『大和本草』の膨大な資料を通じて、『万葉集』の中に詠まれている「霍公鳥」は現在の「カッコウ」ではなく、「ホトトギス」を指している。そして万葉仮名で表示されている「保登等芸須」は「ホトトギス」ではなく、「霍公鳥」の文字を借りて「カッコウ」を指していたのである。注意を払うべきは、青木は中国の南北方におけるホトトギスとカッコウの分布状況を考察した際に、前漢の楊雄の『方言』と三国時代の陸璣『毛詩草木鳥獸蟲魚疏』の中に中国で言われていた布穀（カッコウ）の表記を引き合いにしたことである。以下の表のようにまとめている²⁹⁾。

28) 青木正児「子規と郭公」、『全集』第八巻、108頁。

29) 同前注、112頁。

揚雄の『方言』	陸璣の『毛詩草木鳥獸蟲魚疏』
鵠 穀 ki-kū	布穀 pu-ku
擊穀 ki-ku	歩姑 pu-ku
穫穀 kuo-ku	搏穀 po-ku
郭公 kuo-kung	撥穀 po-ku
	勃穀 po-ku
	保姑 po-ku

「つまり鳴声の子音をKと聞くかPと聞くかの相違で、日本語の『カッコウ』や英語のCuckooも前者に属するわけである。此の中で我国に行はれた『郭公』といふ名称は、唐代の文献に至つて始めて見出される」³⁰⁾ という結論を得たのである。字音から名称の変化を考察する手段は清代の訓詁学の常用方法である。この点から見ると、青木は名物学を伝統的な訓詁学から独立させようとしたが、結局彼自身の言ったように清代の考証学的な名物に帰着させている。

「鮭はサケに非ず」、「櫻桃はユスラウメに非ず」、「茱萸はグミに非ず」、「鶯はウグヒスに非ず」、「薇」はゼンマイに非ず」などに示されているように、青木の名物の確定についての論考を多く見られる。この類の論考は江戸時代の本草学の延長と見なすことができる。

また、戯曲を専攻していた青木は、戯曲のテキストの中に現われた難解な名称の考証を行った。例えば、元雑劇『望江亭』の中に酒宴の場を盛り上げるために鬨詩の試合があつて、甲の出した「鶏頭箇箇難舒頭」に対して、乙が「龍眼团团不転睛」とその対句を作った。このくだりに対して、「私は学生時代、此の一折を狂言風に意識して見たことが有るが、当時此の『鶏頭』を、例の鶏のトサカに似た花のことばかり早呑込みしていたので、龍眼の『团团』と云ふ詞に対して、鶏頭の『箇箇』と云ふ形容の詞が、どうも腑に落ちかねた」³¹⁾と青木は振り返っている。青木は調査の結果、戯曲の中の「鶏頭」は日本でケイトウの花ではなく、「芡」即ち和名オニバス（鬼蓮）あるいはミズブキ（水蓼）に相当し、日本で「ケイトウ」と呼ばれる花は中国で「鶏冠」と呼ばれていることをつきとめた。正徳年間に成立した寺島良安の『和漢三才図会』の中に記された「鶏冠、俗云鶏頭」という誤りを指摘した。なお、「龍眼」とは中国の福建・広東に産出し、直径2センチぐらいの円い木の実で、外は薄い殻をかぶり、中には円く種があり、殻と種の間には白い柔軟甘美な食用できる果肉がある。それ故に、「鶏頭の子は一つ一つ累なつていても、鶏の頭とは名のみで、実際に頭を舒べることは難しい。龍眼の実はまん丸く

30) 同前注、112頁。

31) 青木正児「鶏頭と鶏冠」、『全集』第八巻、177-178頁。

ころころしていても、龍の眼とは名のみで、実際に目玉を転ばすことは出来ない、と云ふ言葉の戯れ」なのである。

加えて、「名物学の根源は『詩経』の名物学に在つた」と指摘した青木は、自身も『詩経』の名物に関する研究を試みた、「『錡』の形状に就いて」という論考である。この論考には、『詩経』の中の「豳風」の「破斧篇」に「既破我斧、又缺我錡」を問題として、「錡」という道具のかたちと用途について考察した。様々な文献にかかわる描写を比較して、「思ふに錡の齟齬せる刃は此のやうにして廻はしつづつ円い穴を穿つたであらう。然らば見方によつては或は錐の属とすることができやう」、「故に三叉錐も以て類推し得べき錡を、古人が『鑿之属』と称したことは不当ではないと考へられる」³²⁾との結論を出している。

そして清代の考証学の影響を受けているせいか、青木自身の酒好きの性格のせいか、昭和三十七年（1962）十月、最晩年の青木は大和文華館の館長矢代幸雄の誘いを受けて、同美術館で「中国上代の酒器」を題にして講演した。「私は考古学や美術には素人ですが、中国の文化史には興味を持つてをり、そして近頃は名物学と云つて、品物の名前と実物との関係を考へる学問を治めてをりますので、この両方面から上代の酒器を見て、大体宋代くらい迄の酒器の形式の沿革を考へてみようと思ひます」³³⁾と講演の冒頭で語っている。青木は最初に文字学から形象漢字「酒」の構成と意味を説明してから、樽、彝、罍、卣、壺といった酒を盛る容器と、罍、爵、觶、觥といった酒を飲む酒盃のかたちと用途を詳しく紹介した。これは前に触れた清代に盛んに行われた器物の考証研究と繋がっている。青木の名物学研究は清朝の考証学的な名物学から完全に脱皮しているわけではない。

名物学に関する研究としては出版された書のほか、前述した「青木文庫」に彼の手書きノート十二冊が残っている³⁴⁾。同大学の張小鋼教授の調査によると、そのうち十冊が名物学と深く関わっている。これらのノートには食べ物を中心に、酒、茶から園芸植物、身の回りの品々に至るまで多種多様な物や項目が登場し、その内容は微に入り細を穿つたものである。十冊のノートは、自らの考察を深めていくうえで、なくてはならない存在であったのであろう。「借読鈔存」(五)と表題した十冊のノートの一冊に記述されている例を挙げる。明朝の滅亡とともに亡命し、水戸藩主の徳川光圀（1628-1700）に仕えた儒者朱舜水（1600-1682）の言葉を記録した『舜水朱氏談綺』の抄録に続き、次のようなコメントを書き添えている。

32) 青木正見「『錡』の形状に就いて」、『全集』第八卷、170-171頁。

33) 青木正見「中国上代の酒器」、『全集』第七卷、392頁。

34) 名古屋大学附属図書館編「『遊心』の祝福——中国文学者・青木正見の世界」（名古屋大学附属図書館、2007年）56頁。

此巻名物を明らむるに益少なからず、余嘗て「橙」をユズなるべきを考へ、おりおりその考証資料の蒐輯を心がけしが未だ確証を得ざりしに、此巻には明らかに之を訓ぜり、甚だ我意を得たり。又嘗て支那の詩文に梅花の香を詠ずること多く、而も我国の梅花さほど香らざるを怪み是を風土の差異に帰すべく考へ居りしに、此巻には明らかに支那梅花の日本梅花に比し香深きことを言へり。その他魚類鳥獸名などの名義を考ふる資料に此書を借閲し、因て此巻を見出し得て喜び禁ぜず、遂に暑気を凌いで病余全巻を抄写す。

昭和廿一年七月二十五日朝 正児識す

翌年（1947）、青木は「柚の香頭」という論考を完成した。その中に次のような内容が見られる。

ところが偶然『舜水朱氏談綺』を閲して確証を得た。此の書は明末亡命して我が水戸光圀に仕へた朱舜水の言説を、門人安積澹泊が備忘の為に記録したものであるが、其の巻下の語彙集の中に、

橙子、ユズ。日本ニテ柚ト云ハ誤ナリ。唐山ノ柚、上ニクビレメアリテ肉ナシ。下ニ肉アリテ徑六七寸アリ。云々

と見えている。朱舜水は彼我両国の宝物を知り、これを比較して言ったのであるから、此の一語は信じてよいはずである。私は是を見て我が推定の誤たざりしを喜び、ほつと安堵の胸を撫でおろした。³⁵⁾

「橙」という漢字の和訓は「ダイタイ」だが、中国では『ユズ』を意味するという結論が、『舜水朱氏談綺』によって実証されたため青木は大いに喜んだ。そのことが「柚の香頭」を書く自信をもたらしたに違いないが、それは彼の残したノートが存在によって明らかになった。その余勢を駆って、昭和二十六年（1951）に「香橙」、昭和三十三年（1958）に「田中博士の橙説を駁す」という二本の論考を発表した。

次は青木のノートで「黒坊の手水壺」と見出しのついた次の興味深い一文を見よう。

黒坊雪隠へ行時は、小き壺を水を入つて携行き、糞を放たる跡を其水にて洗ふと也。極寒中にも左の通りなり。其手水壺は藤にて手を附たる物にて、うち見には雅なる物なりと、同人の話なり。予近き比去方へまかりしに、主人插花を好む人なるが、此頃甚珍物を

35) 青木正児「柚の香頭」、『全集』第八巻、53-54頁。

得たり、紅毛焼の花瓶の、しかも藤にて手を附けたるを求め出たりとて、したり顔にて取出したるを見れば、まがふべくもあらぬ黒坊の手水壺なり。予笑止に思ひて、此壺はしかじかの事に用ゆる、至て不浄なる器なりとさとしけれど、主人ははなはだ不得意なる体故、強ても云ずしてやみぬ。云々。(『紅毛雑話』巻一)

正按、予が大学生の頃なりしと覚ゆ、帰省せしに二階の広間の床に藤にて胴を網の如くかぶせ、上部に提手を付けたる瓶に花を生けたるありき。先考は南蛮瓶なりと語られき。是正しく右に謂ふ所の壺なりしなり。其後紅毛雑話に右の記事を見出し一抹不快の感を覚えしが、折角父が楽み居らるる品にケチをつけて不快ならしむるにも当らずと思ひて遂にもだしぬ。頃日再び此書を綴き、昔を思ひ出して抄録す。

(昭和二十九年九月二十八日)

室町末期から明治末期まで続き、困難な貿易の相手国であり技術的先進性をもつスペインやポルトガルなどの西洋諸国への憧憬により生じた「南蛮趣味」に駆り立てられ、泣くにも泣けず笑うにも笑えないエピソードであった。東洋・西洋の文化の相異によって人々の壺に対する美意識と価値観が異なり、その文化的差異により壺の用途も日本に伝わってから変わったのである。青木は不快感を覚えていたが、名物の異文化の差異を忠実に記述している。

青木のノートの学術価値は前述の名物学の裏付け資料であるのみならず、これから彼の名物学研究をさらに深めていくために、参考になる資料でもあることにある。たとえば、楽器、化粧品、服装、家具、陶磁器、風俗関係などの内容はまだ素材として眠ったままである。その中でも注目すべきは日本の名物学関係の内容である。例えば物の起源に関するものだけで次のような条目が見られる。

- たぬき汁 (『鄙事備忘』)
- 天麩羅の始まり (『竹窓雑鈔 一』)
- 砂糖和製の起源 (『竹窓雑鈔 一』)
- 鰹を芽出度しとすることの起源 (『竹窓雑鈔 一』)
- 八幡山の竹 (初めて電球が完成されたとのこと) (『竹窓雑鈔 一』)
- 書院の起源と故実 (『竹窓雑鈔 一』)
- 宇治茶の起源 (『竹窓雑鈔 一』)
- 音羽の瀧の始まり (『竹窓雑鈔 一』)
- とろろの起源説 (『竹窓雑鈔 一』)

飲食に関する青木の名物学の研究を見渡すと、主に日中両国の比較研究をアプローチとしていた。いわば日中比較名物学とも言える。前述の『中華名物考』の中に収めている論考「落雁と白雪糕」「唐風十題」「酒觴趣聞」などはまさにそれであり、またノートの中で、上述の「たぬき汁」の条目に、青木は「支那料理の『煨毛鷄』と相似なり」と書き加えたうえで、中国遊学の際に購入した李公耳の『食譜大全』を参考にし、その中の「煨毛鷄」の内容を詳細に記録していた。このように青木の名物学の研究は常に中国との比較を念頭に置いていたことが分かる。また、日中比較の名物研究にとどまらず、東西比較名物学の端緒も窺われる。例えば、『華国風味』に「用匙喫飯考」という論考が見られ、それに対して青木のノートの『鴻城雜記』には「英国フォーク使用の歴史」の条目がある。前者は昭和十九年（1944）に発表されたが、後者は昭和二十五年（1950）に書き残したメモである。イギリスのフォークに対する関心は「匙」の延長と見なすことができる。

ちなみに、青木が逝去する二年前の昭和三十七年（1962）、酒と食に関する名物の研究『酒中趣』が刊行された。酒に関する名物研究は前述の『中華名物考』の中に「酒觴趣談」の一文があったが、まだ十分にその説を展開しているとは言えなかった。それ故に、『酒中趣』は酒に関する総合的な名物研究と言える。「酔迂叟」と自称していた青木はその書の序文に「酒はもとより吾が性の愛するところ、酒の書を著すことは、楽しみ中の楽しみである」³⁶⁾と述懐している。

5 おわりに

青木の名物学研究のアプローチをまとめてみると、膨大な資料から物あるいは事象に関連する部分を引き出し、音・形・意の方面から比較・反証などの方法を通じて、その変化の過程、名物隔離の要因などを証明している。江戸期から研究されつつあった本草学とはやや異なり、青木の名物研究は彼の中国風俗の関心から発したため、その研究対象は主に日中両国の物事の比較に集中している。また実証的研究を求めている近代学術背景から言うと、青木の名物学研究は近代性を帯びているが、その研究主題は個人の興味の赴くままに選ばれていたことも見逃してはならない。一方、彼の「名物学序説」は日本で初めて出版された理論書としては評価すべきである。

次に青木の名物学研究の評価について少し述べたい。昭和四十二年（1967）、次世代の中国現代文学学者竹内好（1910-1977）の評論「『餅』と『餌』」が雑誌『中国』に掲載されている。この文章は全体として青木の緻密な研究について肯定的な立場を取っている。次の一文を読むと

36) 青木正児「酒中趣の序」、『全集』第九巻、3頁。

その一端が窺える。

青木さんのことは、(中略) なにしろ大学者でかつ文章家である。ここに挙げた随筆類も、おどろくべき博引旁証であって、しかも退屈を感じさせない。まずは見渡したところ、青木さんの遺鉢を継ぐ人は今後現れそうにない。もっとも、博引旁証とは言っても、そのかなりの部分は書類に頼っているらしいのを、今度発見した。ただし青木さんのことだから、類書からの引用であっても、きっと原典に当る手間を省いてはいないだろう。(中略) それにいたる過程の考証および推論は、きわめて複雑である。なにしろ古今にわたって無数の文献があつかわれており、その網の目をぬって、名辞の変遷と、実体の変遷とが、比較検討されている。名辞と実体とは、一致することもあり、一致しないこともあるから、その考証たるや並たいていではない。そこにまた、考証だけがもつ滋味がかくされているわけだが。³⁷⁾

「博引旁証」、「原典に当る手間を省いてはいない」、「考証たるや並たいていではない」といった言葉で青木の緻密な考証を評価し、その膨大な読書量を「遺鉢を継ぐ人は今後現れそうにない」とまで言い切った。しかし、二ヶ月後、同誌で竹内の「学界の清風」という文章も掲載された。この文章では、中国少数民族の研究に取り組んでいた松村一弥という若手学者を紹介した。『中国の音楽』を見ればわかるように松村さんの方法は、中国の文化を考える場合、漢民族中心の一方交通のせまい見方を排除することが大きな特色になっている。辺疆の少数民族との接触、交流にことさら眼を向ける態度が強調されている」と彼の研究視点を高く評価している一方で、「松村さんの方法上の強みは実証性である。民間文学を見るのに、漢訳されたストーリーや歌詞だけではなく、一方で音韻や楽譜を照らし合わせる。文学だけではなく音の要素が加わる。これは磐石のかまえだ。ことに文字をもたぬ民族の文化をしらべ、比較するとき、絶対の強みを発揮する。いかにも青木正児さんは博識だった。しかし青木さんの知識は、ほとんど文献の知識にかぎられていた。その点で青木さんの学問はもう古い。音韻学にしたって、過去の音韻学は音の相対値しか決められなかった」³⁸⁾とも漏らし、青木の名物学研究方法を批判している。

では、敗戦を契機に日本の学問状況が大きく変わりつつあった時代を背景にして、「青木さん

37) 竹内好 「餅」と「餌」(『竹内好全集』第十卷所収、1981年、筑摩書房) 185-187頁。

38) 竹内好 「学界の清風」(『竹内好全集』第十卷所収、1981年、筑摩書房) 194-195頁。

の学問はもう古」くなったのか。竹内の青木への批判をまとめれば、膨大な古典資料を考究するにとどめ、古典資料を唯一の基準にし、その研究と現実との繋がりに無関心であった、という三つの点となるであろう。上述した青木の名物学の研究から見ると、その研究アプローチは確かに古典資料に頼りすぎる傾向があったが、その名物学研究は決して時代遅れではなかった。世界がグローバル化しつつある時代において、異文化との交流とその理解は当代人にとって直面しなければならぬ問題になり、その中で最初にぶつかった障碍は他国の名と物との異なりである。この問題に関して、青木の「名義瑣談」論考はその先見性を示している。

また、青木の力作『支那近世戯曲史』の自序に「長沢規矩也君は稀覯の曲本に就きて時々其所得所見を報道せられ」と記されているように、青木と親交が深かった長沢規矩也（1902-1980）は青木の考証研究と読書について、次のように振り返っている。

雑誌『支那学』の中には、博士の考証的論文もかなり多く収載されている。しかし、博士は、考証はそれほどお得意ではなかったというよりも、その方面には必ずしも十二分の努力——特別な資料の積極的搜索——はされなかったといえよう。ご自分の蔵書や大学の蔵書を中心に、せいぜい知友から借用できる程度の範囲にとどまっていたといえよう。しかし、その範囲の資料はよく活用された。³⁹⁾

「考証はそれほどお得意ではなかった」、「十二分の努力——特別な資料の積極的搜索——はされなかった」、「その範囲の資料はよく活用された」といった評価は妥当だと思われる。名物学のみならず、青木が手を出していた文学史、絵画史、民俗学の研究に対しても当てはまる。その研究は基本文献を網羅的に収集し吟味しているとは言えないが、自身の興味を持っているものだけに緻密な考察を行うのであった。

「貧弱ながら本業外の道楽仕事としては、聊か会心の笑みの浮ぶを禁じ得ない。私も今は隠居の気楽な身の上、もうこれからはこれを本業にしようかとも思ふ」と青木自身が嘯いているように、依然として青木の名物学に対するまなざしは、彼の興味の赴くままの姿勢であったのである。

39) 長沢規矩也「青木先生とわたくし」、『全集』第一巻月報、4頁。